アメリカ社会で南部白人を「知らない人」たちの人口的特徴と社会・政治意識
― GSS1990 の欠損値の分析 ―

山　元　里　美

1　はじめに

2016 年にドナルド・トランプ氏が第 45 代大統領に就任して以降、彼の支持層とされるアメリカ南部白人への注目が高まった。トランプ元大統領が当選した 2016 年にアメリカ南部白人を研究対象とした学術書（Hochschild2016; Isenberg 2016）が刊行されたことで、アメリカの南部、中西部、山岳部に多いホワイト・トラッシュ（white trash）と蔑視される低所得者層の白人（Wray 2006）に再び目が向けられるようになった。

アメリカ社会では主流派であるはずの白人だが南部白人は特異な存在として捉えられている（Cash 1991[1941]）。一般的なアメリカ人は、南部白人を過疎集落で育った保守的で低学歴の貧困者だという印象を抱いており（Reed 1993）、白人特権（white privilege）を享受できるはずの立場でありながら蔑視される傾向がある。有色人種に対する蔑視・差別意識は大々的に報道される一方、ホワイト・トラッシュは忘れ去られた存在である。学術的には白人特権を中心にホワイトネス研究が行われてきたが、近況の南部白人やホワイト・トラッシュに関する研究は手薄である。

1990 年総合的社会調査（General Social Survey1990, 以後 GSS1990）には北部白人（Northern Whites）、白人（Whites）、南部白人（Southern Whites）に対する印象を聞いた質問項目が含まれている。本稿の目的は、1990GSS の中で南部白人に関する質問項目を「知らない」（Don't Know）と答えた人たちの属

性を調べた上で、本当に南部白人を知らないのか、それとも無関心なのか、または他の意図が隠されているのかを調べることである。具体的には、Don't Know 回答者と Do Know 回答者（南部白人の質問項目を回答した人）の記述統計結果と χ 二乗検定結果の分析を行った。

2 「知らない」(Don't Know）に関する先行研究

アンケート調査では調査対象者から回答を得られないことが往々にしてある。無回答の種類には「知らない」(Don't Know)、「該当しない」(Not Applicable または Inapplicable)、「回答拒否」(No Answer または Refused）がある。これらは統計解析をする際に欠損値として取り扱われ、計算過程から除外される値である。全体の数パーセント程度の欠損値であれば解析結果に支障はきたさないが、全体の 1 割前後を超えるほどの数になると正確な分析結果が得られない可能性がある。

そこで、欠損値の取り扱いについては多くの議論が重ねられてきた。技術的な側面としては、他の変数の情報を参考にして近似値を代入する方法だ（Guan and Bahri Yusoff 2011)。しかし、近似値を入れることで分析結果の正確性が増すかは定かではなく、現在もさまざまな代入方法が開発されている。

一方、回答者が「知らない」と答えるにはそれなりの理由があるとも考えらえる。回答者が質問の内容を理解できなかったり、本当に選択できないから「知らない」と答えたり、調査員に本音を語りたくないが嘘もつきたくないので「知らない」と答えた場合だ。そのような情報をモデル解析に入れると解析結果を歪曲させる可能性があるので「知らない」をデータ分析に入れるか否かは慎重に判断するべきだとの研究報告（Jessee 2015; Krosnick 1991; Krosnick et. al 2002; Luskin 2011）はある。

これに対して、回答しにくい質問を「知らない」と答えたのであれば、その背後にある意味を探るべきだと主張する研究報告 (Brooks 2004) がある。例えば、政治的・宗教的信条、差別意識、性行為、性的指向、犯罪行為、麻薬使用の有無など、回答者が質問に答えることで不利益を被る場合、明言を避ける可能性がある。また、回答者にある程度の知識が備わっているにも関わらず「知

らない」という答えが一定数みられるのは当該質問項目が幅広く浸透していないことを示している（Bolcic-Jankovic et. al. 2021; Brooks 2004; Manisera 2014）とも考えられる。

GSS 1990 の南部白人に関する質問項目の回答者数をみてみると「知らない」（Don't Know）と答えたアメリカ人が全回答者数の 1 割前後いる。では、どのような人たちが南部白人「知らない」と答えたのか。上述の研究報告が示唆するように、回答者が無知なのか。それとも、世間体を気にして敢えて「知らない」と答えたのか。あるいは、他の理由があるだろうか。

3　GSS1990 の分析と考察

総合的社会調査（General Social Survey または GSS）はアメリカのシカゴ大学にある全国世論調査センター（National Opinion Research Center）がアメリカに居住する人たちの意識を調査するために 1972 年から毎年または隔年で実施してきた世論調査である。サンプリング方法は多段階抽出法であり、2008 年以降は三段階サンプリングを採用している。従来の調査対象者は英語を理解できる 18 歳以上のアメリカ居住者であったが、2006 年以降はスペイン語話者も含まれている。アンケート調査員の採用と基礎的な知識の教育は調査対象地の責任者が行っており、GSS の知識に関する試験に合格した者のみが NORC でアンケート調査の訓練に臨む。データ収集後に何らかの問題が生じた場合、NORC が各調査員に直接問い合わせることで GSS のデータの質の担保しており（NORC n.a.）精度の高い社会調査データとして知られている。

3－1　使用変数の説明

本稿の分析対象者を抽出するにあたり、6 つの質問項目（wlthso, workso, violso, intlso, fareso, patrso）を 1 つでも Don't Know と答えた回答者をプーリングした。例えば、wlthwht は白人の経済状況の印象を聞いた尺度変数だが、回答者は 7 段階評価の中から 1 つの数値を選択する代わりに「知らない」（Don't Know）を選択することもできる。また、回答者が答えなかった時は「回答拒否」（No Answer）、当該質問を回答する条件を満たしていない「該当せず」

（Inapplicable）などを、調査員が選択する仕組みになっている。

wlthwht の質問内容：

では、アメリカ社会の多様な集団に関する質問をします。7段階評価票を見せますので、各集団の特徴がどの評価に該当するかを選択してください。例えば、評価1を選択した場合、その集団の大半を「金持ち」だと捉えていることを意味します。評価7を選択した場合、その集団全員を「貧乏」だと捉えていることを意味します。評価4を選んだ場合はどちらでもないことを意味しますが、もちろんその間の評価基準を選択されてもかまいません。ご自分の考えに一番近い評価を選んでください。

1．7段階評価中、白人はどこだと思いますか。

調査員は上記の文言を用いて人種・エスニシティに該当する箇所を「ユダヤ人（Jews）」「黒人（Blacks[1]）」「アジア系アメリカ人（Asian Americans）」「ヒスパニック系アメリカ人（Hispanic Americans）」「南部白人（Southern Whites）」と変えて質問する。上述の質問項目（wlthwht）を「知らない」と答えた回答者数は40名である。

一方、白人以外の質問項目で「知らない」と答えたアメリカ人の数は三桁にのぼる。個別にみてみると、ユダヤ系アメリカ人に係る質問（wlthjews）が105名、アジア系アメリカ人（wlthasns）は128名、ヒスパニック系アメリカ人（wlthhsps）には113名、南部白人（wlthso）は15名である。つまり、アメリカ社会において南部白人はエスニック・マイノリティ集団と同じようにあまりよく知られていない集団である。

変数 wlthso の以外に上記の質問形式を採用した変数には南部白人の勤勉さ（workso）、暴力性（violso）、知性（intlso）、愛国心の強さ（patrso）、社会福祉制度への依存度（fareso）がある。

[1] GSS では1972年の質問票との一貫性を保つために African Americans ではなく Blacks という表現を敢えて使用している。

表１　アメリカ人回答者の南部白人に対する印象（GSS1990）
（N=1372）[2]

	変数名	当該質問を回答したアメリカ人の数	当該質問を回答したアメリカ人の平均値（標準偏差）	Don't Know と回答したアメリカ人の数（%）
貧困者が多い	wlthso	1236	4.08（± 1.12）	115（8.4 %）
怠惰な人が多い	workso	1236	3.67（± 1.23）	107（7.8%）
暴力的な人が多い	violso	1216	3.87（± 1.23）	128（9.3%）
知能が低い人がい	intlso	1230	3.66（± 1.51）	110（8.0%）
社会福祉制度への依存度が高い	fareso	1219	3.43（± 1.30）	122（8.9%）
愛国心が強い人が多い	patrso	1217	2.77（± 1.31）	121（8.8%）

例えば、wlthso の全国平均値は 4.08（±1.12）であることから、アメリカ社会では南部白人はさほど経済的に困っていないと認識されており、その中で南部白人の経済状態を「知らない」と答えた人たちは 115 名（8.4%）いる。一方「南部白人は愛国心が強いと思うか」（patrso）という質問を Don't Know と答えた回答者は 1372 名中 121 名（8.8％）、7 段階評価の中でいずれかををつけた回答者数は 1217 名（88%）である。評価をつけた回答者の平均値は 2.77 で標準偏差が±1.31 であることから 7 段階評価の幅が 1.46 から 4.08 の間におさまることを意味する。つまり、南部白人の愛国心は若干弱いと感じられていることを示している。

表 1 の結果から読み取れるのは、南部白人には普通の生活を営めるだけの経

[2] Inapplicable と No Answer の回答者を含んだ総数である。

済力があり、社会福祉制度への依存度は若干低いが、少し怠惰なところがあり、知性もさほど高くなく、愛国心が低い温厚な人たちだとアメリカ社会では認識されていることがわかる。また、南部白人に関する知識のない人たちが1割ほど存在する。

3－2　属性と居住地域

次に、南部アメリカ人に関する知識の乏しい人たちを Don't Know 回答者と定義し、それ以外を Do Know 回答者と分類して、それぞれの属性を整理した。

表2　南部白人を知らない人たちの属性（GSS1990）

	Don't Know（n=219）	Do Know（N= 回答者数）
年齢（標準偏差）	51.8（±20.39）	45.96（±18.07）（N=1372）
男性（%）	35.1	44.02（N=1372）
人種（%）		（N=1372）
白人	79.45	83.82
黒人	14.16	11.59
宗教		（N=136）
プロテスタント	59.82	63.06
カトリック	21.46	23.92
ユダヤ教	2.74	1.98
学歴		（N=1367）
高校中退・中卒	34.86	20.63
高卒	46.79	53.11
短大卒（2年制大学）	4.13	5.49
大卒（4年制大学）	8.26	14.41
大学院卒	5.96	6.36
居住地域	（N=219）	（N=1372）
北東部	19.18	19.90

	Don't Know（n=219）	Do Know（N= 回答者数）
中西部	23.29	27.48
南部	36.07	33.38
西部	21.46	19.24
雇用状況（%）	（n=216）	（N=1351）
有職者	46.76	62.99
無職者	2.31	4.37
定年退職者	22.22	14.36
学生	5.09	3.55
専業主婦（夫）	23.61	14.99

まず年齢をみてみると、南部白人に関する知識が乏しい人の平均年齢は 52 歳であり、1938 年前後に生まれた世代である。一方、南部アメリカ人の存在を認識している人の平均年齢は 46 歳であり、1944 年前後に生まれた世代である。総括すると、1901 年から 1972 年に誕生した男女が回答者層である。

男女比率を比較してみると、南部白人を知らない人は男性のほうが少なく（35.1%）、半数以上が女性である。人種比率を比較すると、白人が 80% 弱、黒人が 15%弱であり、Do Know 回答者の割合と比較しても大差ない。宗教に関してもプロテスタント教徒が 60% 弱、カトリック教徒が 20% 強、ユダヤ教徒が 2.8% 弱と Do Know 回答者の比率と大差ない。

一方、学歴には特徴がみられる。南部白人の関する知識が乏しい人の 34.9% が中学校卒業程度あるいは高等学校未卒業者である。また、高等学校卒業者は 46.8% であり、2 年制大学を含む高等教育を受けた人たちは 18%強である。Do Know 回答者の割合と比較すると、Don't Know 回答者の高等学校卒業者と 4 年制大学卒業者が若干少ない。この理由として考えられるのは高等学校教育の大衆化である。1944 年復員兵援護法（Servicemen's Readjustment Act of 1944）の施行に伴い、アメリカ連邦政府は復員兵が民間人としての生活を取り戻せるように教育に係る手厚い資金援助を施した。1944 年から 1951 年にかけて 800 万人の復員兵が連邦政府から学費援助金が交付された結果、1945 年には学士号

以上の取得者が全人口の 4.5% ほどだったのに対して 1995 年には 25% まで上昇した（U.S. National Archive and Records Administration n.a.）。つまり、学位取得の有無は当時の社会状況を反映したものであって、Don't Know 回答者と Do Know 回答者との間の学力の高低差を表したものではないと考えられる。

南部に居住している人の割合も算出した[3]。GSS1990 を実施した場所を回答者の居住地域と想定して北東部、中西部、南部、西部における割合をアメリカ国勢調査局の分類方法を用いて計算したところ、南部白人に関する知識の乏しい人の多いのは南部（36.07%）であり、次に多いのが中西部（23.29%）と西部（21.46%）、一番低いのは北東部（19.18%）であった。この傾向は南部白人の知識を有する人にもみられることから、回答者が住んでいる土地柄と南部白人に関する知識の有無には関係がない。

ところが、雇用状況には違いがみられた。南部白人に対して知識の乏しい人の有職率は 46.7% であり、Do Know 回答者の比率 63% と比較すると低いのだが定年退職者の割合（22.2%）と専業主婦（夫）の割合（23.6%）は高い。そこで、男女別に婚姻状況と掛け合わせて比較してみたところ、表 3 の結果が得られた。実数が多いところを太字で表している。

表 3　南部白人の知識が乏しい人の雇用・婚姻状況（男女別）

	有職者		無職者		定年退職者		学生		専業主婦		
既婚	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	小計
既婚	**27**	**33**	1	0	**12**	**8**	0	0	1	**18**	100
死別	0	3	0	0	**4**	**18**	0	0	0	**21**	48
離別	3	6	0	2	3	1	1	1	0	4	21
別居	4	2	0	1	0	0	0	0	0	2	9
未婚	**11**	**11**	0	1	1	1	6	3	1	4	39
小計	**45**	**55**	1	4	**20**	**28**	7	4	2	**49**	

* 雇用状況の未回答者 3 名、婚姻状況の未回答者が 1 名いる。

[3] GSS1990 の中には「近しい親戚がアメリカ南部出身者と結婚しても気にならないか」とう質問項目（変数名 marso）がある。その中で南部の定義はアメリカ国勢調査の区分を採用しており、大西洋南部（South Atlantic）、南中部東（East South Central）、中部西（West South Central）を南部（Southern）と定義している。

有職者のうち既婚男性が 27 名、既婚女性が 33 名、未婚男性が 11 名、未婚女性が 11 名である。定年退職者のうち既婚男性が 12 名、死別した女性は 8 名である。また、専業主婦は女性のほうが多く、49 名のうち 21 名は死別しており残りは既婚者であった。まとめると、有職者の男女比率は同程度であるがその大半は既婚者と未婚者が占めている。定年退職者の大半は既婚者と死別者であり、専業主婦（夫）の大半は女性既婚者と女性死別者である。

要するに、南部白人に無関心な人には 1901 年から 1972 年に生まれた白人女性のキリスト教徒（プロテスタントとカトリックを合算）が多い。この女性たちに限定して平均年齢を再計算すると、彼女たちの平均年齢は 53 歳前後であり、その多くは高校卒業者または高校未卒業者である。働く女性（平均年齢 39.17 ± 13.39 歳）が多いが定年退職者（平均年齢 74.78 ± 8.01 歳）と専業主婦（平均年齢 60.06 ± 20 歳）も一定数いる。死別・離別・別居を含めると、彼女たちの大半が婚姻経験者であり、アメリカ社会の一般的な女性たちだと推察できる。

３－３　政治意識の違い

南部白人に関する知識の乏しい人に白人女性のキリスト教徒が多いことが明らかになったが政治意識には特徴があるのだろうか。投票行動（vote88）、支持政党（partyid）、政治観（partyid）、政治への関心度（polint）の変数を用いて男女別の割合を算出した。

表 4　南部白人に関する知識の乏しい人の政治意識の男女比較

	男性	女性
1988 年の大統領選挙（%）	（n=33）	（n=138）
投票した	60.27	56.52
投票しなかった	34.25	37.68
選挙権なし	4.11	4.35
回答拒否	1.37	1.45

	男性	女性
支持政党	(n=77)	(n=142)
共和党	27.27	25.35
民主党	38.96	42.25
無党派	31.17	31.69
その他の政党	2.60	0.70
政治観	(n=71)	(N=119)
保守派	30.99	34.45
リベラル派	32.39	23.53
どちらでもない	36.62	42.02
政治に関心が高い (5段階評価)	(n=62)	(N=109)
平均値(標準偏差)	3.10(±1.11)	2.85(±1.26)
選べない	6.45%	5.50%

まず、政治に対する関心度を比較すると女性のほうが 2.85 ± 1.26 である。男性と比較すると政治にさほど関心のある人はいない。しかし、政治にどの程度の関心があるかを選択できなかったと答えた人の割合は男性のほうが若干高い(6.5%)。

次に政治観だが、男性は「リベラル派」「保守派」「どちらでもない派」がほぼ均等に分かれているのに対して、女性はリベラル派が 23.5%、保守派が 34.6%、どちらでもないと回答した人が 40% である。つまり、4 割の女性が自分の政治観を意識していないが、政治観を意識している女性の場合、その大半が保守派である。

支持政党に関しては男女共に同様の傾向がみられる。民主党支持者が 4 割前後であり(男性:38.9% 女性:42.2%)、無党派が 3 割前後(男性:31.2% 女性:31.7%)、共和党支持者は女性のほうが若干少ない(男性:27.3% 女性:25.3%)。つまり、南部白人に関する知識の乏しい女性の多くは民主党支持者だが政治観は保守派でもリベラル派でもなく、政治への関心もさほど強くない。このよう

な状態で実際に大統領選挙の投票に行く人は男性で 60.3%（Do Know 回答者：65.3%）、女性で 56.5%（Do Know 回答者：65.8%）である。

３－４　無関心なのか、それとも無知なのか

本論文のデータは南部白人の知識が乏しい人たちだけを抽出したが、その人たちが他の物事に対しても知識がないのか、それとも単に物事に対して無関心なのかは不透明である。そこで、回答者の語彙力を計測した変数（wordsum）、調査員が回答者のアンケート調査の文言をどの程度理解していたかを計測した変数（comprend）、回答者が快くアンケート調査に参加していたかを評価した変数（coop）を用いて、回答者の学力の高低差（Krosnick et. al 2002）、性格（Jessee 2015）が「知らない」という選択肢を選ぶのか、それとも単に調査員を満足させたいだけなのか（Krosnick 1991）を調べた。表５では南部白人の知識が乏しい人（Don't Know 回答者）と南部白人の存在を認識している人（Do Know 回答者）を比較した。

表５　南部白人の知識が乏しい人の語彙力、理解力、協調性

	Don't Know 回答者	Do Know 回答者
語彙力テストの結果	(n=219)	(N=853)
平均値（標準偏差）	5.54（±2.45）	6.13（±2.20）
参加拒否（%）	10.96（24 名）	5.47（75 名）
アンケート票の理解力（%）	(n=)	(N=1353)
よく理解している	63.43	80.04
ある程度理解している	25.00	15.52
理解していない	11.57	4.43
調査員への態度	(n=)	(N=1362)
友好的で関心を示した	59.91	75.18
協力的だった	27.65	19.75
気難しい、いらいつていた	11.52	4.70
敵意を示していた	0.92	0.37

Don't Know 回答者の語彙力テストの平均値（5.54 ± 2.45）は Do Know 回答者の平均値（6.1 ± 2.2）よりも若干低いが特筆するほどの高低差ではない。ただし、語彙力テストを解くことを拒否した人の割合が Don'tKnow 回答者のほうが若干高い（11%）。南部白人の知識が乏しい人は語彙力に自信がないために受験を拒否したのか、受験する行為に対して拒否反応を示したのか、もしくはテストそのものを拒否した可能性がある。

アンケート調査内容の理解力をみてみると、調査員は Don't Know 回答者が内容を理解できていないと解釈していた。例えば、調査員が「よく理解している」という印象を抱いた Don't Know 回答者は 63.4% だが、これは Do Know 回答者（80%）より大幅に低い。また「理解していない」人の割合も Don't Know 回答者は 11.6% だが、Do Know 回答者は 4.4% である。つまり、南部白人の知識に乏しい人たちは GSS1990 の質問項目そのものを理解できていなかったようである。調査員に対する接し方にも違いがみられる。Do Know 回答者の 75.2% が友好的で GSS1990 の内容に関心を示していたが、Don't Know 回答者は 60% ほどしか関心を示さなかった。また、Don't Know 回答者はある程度協力的だった（27.65%）が、その中には GSS1990 に関心どころか気難しい態度で接した人が 11.5% いた。要するに、Don't Know 回答者は GSS1990 の調査を全面的に協力していたわけではない。つまり、南部白人の知識が乏しい人は著しく知力が低いというよりは GSS1990 の内容にあまり関心がないので質問項目の内容をよく理解しないで回答していた可能性がある。

3－5　自分を取り巻く環境に対する関心は高い

南部白人に関する知識の乏しい人が反応を示したのは近隣住民の人種構成と義理の親族の人種に関する質問項目である。一方、人種・エスニシティ集団のアメリカ社会への影響力を尋ねた質問項目（influwht, influblk, influasn, influjew, influhsp, influso）も解析したが統計的な有意差はみられなかった。

3－5－1　近隣住民の人種構成には関心が強い

GSS1990 には「自分の近所の住民の半数以上が○○になる場合、どのように

感じるか」という質問項目がある。この○○の中にはユダヤ人（livejews）、黒人（liveblks）、アジア系アメリカ人（liveasns）、ヒスパニック系アメリカ人（livehsps）、北部出身の白人（liveno）、南部出身の白人（liveso）のいずれかかが入る。回答者は5段階評価（1. すごく嬉しい 2. 嬉しい 3. どちらでもない 4. 反対 5. すごく反対）の中から1つを選択する。本分析では5段階評価を3段階評価に統合してχ二乗検定を行った。その結果、有意差がみられなかったのは北部出身の白人だけであり、その他の人種・エスニシティ集団には統計的な有意差がみられた[4]。

表6　南部白人の知識が乏しい人の近隣住民の人種構成への反応

	ユダヤ人	黒人	南部白人	アジア系アメリカ人	ヒスパニック系アメリカ人
嬉しい	14.6%	14.6%	16.3%	10.4%	12.1%
どちらでもない	67.0%	51.4%	74.8%	59.4%	53.3%
反対する	18.5%	34.0%	8.9%	30.2%	34.5%
小計（n）	206 名	212 名	123 名	202 名	199 名
χ二乗検定	13.496	9.537	13.945	9.2045	8.454
P 値	0.001	0.008	0.001	0.010	0.012

全ての質問項目のP値が0.05以下なので帰無仮説（各セルの間に差がない）を棄却し対立仮説を（各セルの間には差がある）を採択できる。例えば、南部白人の知識が乏しい人は自分の近隣住民の半数以上が黒人になる場合、黒人が住むことを反対する人たちは34%ほどいるが、これが仮に南部白人である場合は拒否反応を示す人は8.9%である。また、「どちらでもない」のボリュームが比較的小さいのは黒人、ヒスパニック系アメリカ人、アジア系アメリカ人であることから、有色人種が近隣住民になることに対して拒否反応を示す傾向がみ

[4] プーリングデータではゼロ・セルが多くでるので3-5-1と3-5-2の分析にGSS1990の総サンプル数を使用した。各セルに5サンプル以上入っているのを確認した上でχ二乗検定を行った。

られる。

３－５－２　義理の親族の人種

次に義理の親族を迎え入れる際にどの人種・エスニシティを好むのかを尋ねた質問項目（marjew, marhsp, marblk, marasian, marno, marso）を使用し、南部白人の知識が乏しい人が好む・拒否する人種を検証した。P 値が 0.05 以下であったのはユダヤ人と黒人だけである。つまり、他の人種・エスニシティ集団には有意性がみられなかった。

表７　南部白人の知識が乏しい人が好む義理の家族の人種

	ユダヤ人	黒人
嬉しい	15.1%	12.6%
どちらでもない	63.6%	40.3%
反対する	21.4%	47.1%
小計（n）	206 名	206 名
χ二乗検定	6.1527	13.4668
P 値	0.046	0.001

南部白人の知識が乏しい人は自分の近しい親戚が黒人と結婚することを反対するが（47.1%）、ユダヤ人に対してはさほど拒否反応は示さない（21.4%）。一方、黒人との結婚を喜ぶ人（12.6%）とユダヤ人との結婚を喜ぶ人（15.1%）の差はさほどみられない。ところが「どちらでもない」を選択した人はユダヤ人（63.5%）の方が多く黒人（40.3%）を上回っている。つまり、ユダヤ系アメリカ人とアフリカ系アメリカ人を基本的には親戚として迎え入れたくないのだが、ユダヤ人に関しては考慮の余地があることを示しており、明らかな拒否反応を示したのは黒人に対してである。

4　結論

GSS1990 の南部白人に関する質問項目を「知らない」と回答した人の特徴として、南部に居住する 50 代前半の白人女性のキリスト教徒であり、その大半が高校未卒業者・高校卒業者であることが明らかになった。彼女たちは 1990 年時点で有職者、定年退職者、専業主婦であり、その大半が何らかの婚姻関係（既婚・死別・離別・別居）を結んでいた人たちである。

先行研究では回答者が「知らない」を選択する理由として学力に低さが挙げられていたが、男女共に語彙力テスト結果から語彙力の低さはみられなかった。しかし、受験拒否をした人が一定数いることから試験に苦手意識がある可能性がある。また、回答者の性格の影響だが、GSS1990 をある程度協力的な態度で臨んでいたことから、投げやりな態度でアンケート票を答えたわけではないことも明らかになった。

では、南部白人に関する知識が乏しいだけなのか。政治への関心度と投票行動を分析したところ、南部白人の知識が乏しい女性は政治への関心は低いかもしれないが投票に行く傾向がみられる。また、支持政党は民主党であるが、自分の政治観は保守的であると捉えていることから、アメリカ社会の中流層が支持する民主党を支持すると公言しながらも実際は保守的な考え方を抱いている。

ところが、社会に関することには無関心だが身の周りに関することについては関心を示している。特定の人種・エスニシティ集団がアメリカ社会に及ぼす影響力に関する意識には統計的有意性はみられなかったが、近隣住民の人種構成と義理の親戚の人種には関心を示していた。近隣住民に関してはアフリカ系、アジア系、ヒスパニック系、ユダヤ系、南部白人に拒否反応を示した。また、新たに迎え入れる親戚がアフリカ系かユダヤ系の場合にも拒否反応を示した。つまり、南部白人を近隣住民という視点で捉えると、自分たちとは異なるエスニシティ集団と解釈するのだが、親戚に迎え入れる場合は拒否反応がみられない。ユダヤ系に対しても近隣住民として受け入れることに拒否反応を示し、自分たちとは異質なエスニック集団と捉えている。ところが、親戚に迎え入れることには拒否反応がみられる。つまり、アメリカ社会において白人とは純粋に肌の色だけで決まるわけではないことが示唆される。

以上のことから、「知らない」と回答した人たちが一定数存在する場合、欠損値としてデータ解析から外すのではなく、その人たちの特徴を調べることで新たな情報を得られる可能性がある。GSS1990 で南部白人に関する質問項目を「知らない」と答えた人たちはアメリカ社会が抱える問題への関心は低いかもしれないが、自身の身の周りに関することには関心のある NIMBY（Not In My Backyard 我が家の裏ではやめて欲しい）集団の特性がみられる。

参考文献

Bolcic-Jankovic, Dragana, Eric G. Campbell, Jessica L. LeBlanc, Manan M. Nayak, and Ilana M. Braun. 2021. “Using ‘Don’t Know’ Responses in a Survey of Oncologists Regarding Medicinal Cannabis.” *Survey Practice* 14(1). Retrieved January 9, 2022 (https://doi.org/10.29115/SP-2020-0016).

Brooks, Arthur C. 2004. “What Do ‘Don’t Know” Responses Really Mean in Giving Surveys?” *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly* 22(3): 423-434.

Cash, W. J. 1991[1941]. *The Mind of the South*. New York: Vintage.

Guan, Ng Chong and Muhamad Saiful Bahri Yusoff. 2011. “Missing Values in Data Analysis: Ignore or Impute?” *Education in Medicine Journal* 3(1): e6-e11.

Hochschild, Arlie Russell. 2016. *Strangers in Their Own Land: Anger and Mourning on the American Right*. New York: The New Press.（布施由紀子訳、2018,『壁の向こうの住人たち―アメリカの右派を覆う怒りと嘆き』岩波書店 .）

Isenberg, Nancy. 2016. *White Trash: The 400-YearUntold History of Class in America*. New York: The Viking.（渡辺将人 , 富岡由美 , 2018,『ホワイト・トラッシューアメリカ低層白人の四百年史』東洋書林.）

Jessee, Stephen A. 2015. “ ‘Don’t Know’ Responses, Personality, and the Measurement of Political Knowledge” *Political Science Research and Methods* 5(4):711-731.

Krosnick, Jon A. 1991. “Response Strategies for Coping with the Cognitive Demands of Attitude Measures in Surveys” *Cognitive Psychology* 5(3): 213-236.

Krosnick, Jon A., Allyson L. Holbrook, Matthew K. Berent, Richard T. Carson, W. Michael Hanemann, Raymond J, Kopp, Robert Cameron Mitchell, Stanley Presser, Paul A. Ruud, V. Kerry Smith, Wendy R. Moody, Melanie C. Green, Michael Conaway. 2002. “The Impact of ‘No Opinion” Response Options on Data Quality: Non-Attitude Reduction or an Invitation to Satisfice?” *Public Opinion Quarterly* 66(3): 371-403.

Luskin, Robert C. and John G. Bullock. 2011. “ ‘Don’t Know’ Means ‘Don’t Know’: DK Responses and the Public’s Level of Political Knowledge.” *The Journal of Politics* 73 (2): 547-557.

U.S. National Archives & Records Administration. n.a. “Servicemen’s Readjustment Act

(1944)." Retrieved January 9, 2022 (http://www.ourducments.gov/doc.php?flash=false&doc=76).

Manisera, Marica and Paola Zuccolotto. 2014. "Modeling 'Don't Know' Responses in Rating Scales." *Pattern Recognition Letters* 45(1): 226-234.

National Opinion Research Center. n.a. "Appendix: Sampling Design & Weighting" Retrieved January 9, 2022 (https://gss.norc.org/DOCUMENTS/CODEBOOK/A.pdf).

Wray, Matt. 2006. *Not Quite White: White Trash and the Boundaries of Whiteness*. North Carolina: Duke University Press.